

お彼岸について

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉どほり、彼岸は季節の変わり目であると同時に、また、祖先をまつる大切な行事でもあります。

彼岸は、春分の日（三月二十一日頃）と秋分の日（九月二十三日頃）をはさんだ前後の三日間づつ、計七日間のことで、それぞれ春彼岸、秋彼岸といひ、彼岸の最初の日を「彼岸の入り」、最後の日を「彼岸の明け」、春分・秋分の日を「彼岸の中日」といひます。

彼岸には、お墓参りをする習慣があり、祖先の霊を家に迎へる盆と



は違って、祖先に会ひにゆく行事としての色彩が濃いやうです。

彼岸は、日本にしかない行事で、豊作に欠かすことのできない太陽をまつり、祖霊の加護を祈る古くからの儀礼と結びついたものといはれておます。

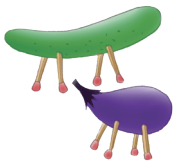
彼岸には、「おはぎ」や「ぼたもち」を供へ、お下がりとして食します。「おはぎ（御萩）」は萩の餅の略称、「ぼたもち」は牡丹餅で、いづれも同じものですが、春の牡丹、秋の萩と季節の花にたとへて呼ぶところに、日本人らしい感性がうかがはれます。



お盆について

盆は、旧暦七月十五日を中心に行はれる祖先をまつる行事で、七月十三日夕方の迎へ火に始まり、七月十六日の送り火に終はります。

一般に盆とは、盂蘭盆（うらぼん）の略とされ、盂蘭盆には梵語（ぼんご）で倒懸（さかさづり）になつてゐるの



を救ふといふ意味があり、あの世で非常な苦しみを受けてゐる死者を供養し救ふ仏教行事とされておます。しかし、供へ物を載せる容器を日本の古語で「ボン」と言つたことから盆になつたといふ説もあり、盆行事は、日本に古くからあつた祖霊祭の名残であらうとも

考へられておます。関東地方では七月十五日に行はれることが多いやうですが、関西などの西日本では月遅れの八月十五日に行ふところが多く、「おがら」と呼ばれる麻の茎や麦藁、松の割り木などを焼く迎へ火・送り火の風習は、江戸時代に盛んになつたと言はれています。また、盆踊りは、本来、祖先の霊を慰め送り出すためのもので、あの有名な阿波踊りも盆踊りの一つです。正月や盆など祖先の霊は年中いく度も子孫のもとを訪れます。正月棚や盆棚（先祖棚）はその際に祖先を迎へる場所で、神棚や御霊舎（みたまや）の原型とも考へられておます。



家のおまつりには、神棚や正月、お盆、お彼岸などのほかに忘れてはならない日常の祖先のまつりがあります。日本人は、古来、人は亡くなつてもこの世にとどまつて、いつでも子孫を見守つてくれてゐる存在だと考へてきました。

先祖のお祭りについて



祖先があり親があつて自分たちの命はあります。折々の御霊祭を通して、先祖から何代にもわたる命のつながりについて考へるとともに、祖先への感謝の心を親から子、子から孫へと受け継ぎませう。

宮崎神宮社務所

〒880-0053 宮崎県宮崎市神宮2丁目4番1号
電話 0985 (27) 4004 FAX 0985 (27) 4030

通夜祭	年	月	日	年	月	日	誕生	行年	歳
神葬祭	年	月	日	年	月	日	日		
十日祭	年	月	日	年	月	日	日		
納骨祭	年	月	日	年	月	日	日		
五十日祭	年	月	日	年	月	日	日		
初盆祭	年	月	日	年	月	日	日		
一年祭	年	月	日	年	月	日	日		

先祖のお祀りの仕方

家庭での先祖のおまつりは、神棚とは別に御霊舎（みたまや）（祖霊舎）で行ひます。祖先の霊が鎮まる御霊代（みたましろ）を納めるところです。御霊代には、一般的に霊鹽（れいじ）が用ゐられます。これは、仏式でいへば位牌にあたります。霊鹽には蓋がついてありますが、通常は蓋をしたままおまつりし、命日や年祭など特別のおまつりのときには外すこともあります。年祭とは、特別な年の命日のおまつりで、亡くなって満一年、以降は数へ三年、五年、十年、以降十年ごとに行ふのが一般的です。（満でも可）

お供へものについて

お供へ物は神棚のおまつりと同様です。お参りも、神棚にお参りした後と同じ方法でお参りします。

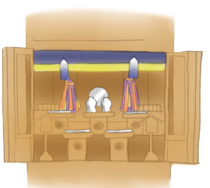
お供へする品目は五十日祭や年祭の時は、主食としてのお米を始め、お酒、魚（鯛）、海菜（昆布、ワカメ等）、野菜、果物、お塩、お水を基本としつつ、故人が生前に好まれた品もお供へください。

※平素は米、酒、塩、水で構いません。



普通は五十年で「まつりあげ」となり、故人の御霊は清められて神様のもとに帰るといわれます。年祭の日には、親戚や故人と親しかった人を呼び、神職におまつりをしてもらひます。

御霊舎は、神棚とは別のところに設けるやうにしますが、家の間取りの関係で、神棚の下や神棚の隣に設けることもあります。神棚の下に設ける場合には、御霊舎は上半身の高さに設けます。神棚の隣に設ける場合には、御霊舎の高さをやや低くするか、それができない場合には、神棚に向かつて左に設けるのがよいでせう。



忌中の際の神社への参拝について

親族が亡くなったとき、身内の者は喪に服しますが、このことを「服忌」(ぶつき)といひます。

忌とは故人のお祭りに専念することをいひますので、忌中とはその最中にあることを意味してゐます。一般的には五十日祭までが忌の期間で、その後には神棚の祭を再開しますから、この期間は神社への参拝も遠慮します。やむをえない場合は、お祓ひを受けてからお参りします。

また、忌の期間に新年を迎へる場合は、忌明けのときにお神札を受け交換するやうにしませう。